審査結果報告書

2024年 1 月 16 日

主 査　氏 名　佐々木治一郎　印

副 査　氏 名　天野英樹　印

副 査　氏 名　吉田 功　印

副 査　氏 名　原留弘樹　印

1．申請者氏名　：　和田　拓也

2．論文テーマ　：　Safety and efficacy of chemoradiotherapy after endoscopic resection in patients with superficial esophageal squamous cell carcinoma
（表在型食道扁平上皮癌に対する内視鏡的切除後の化学放射線療法の安全性と有効性）

3．論文審査結果　：

表在型食道扁平上皮癌と診断された場合、標準治療の１つとして内視鏡切除が選択される。一方、内視鏡切除後の病理診断において、粘膜下層浸潤やリンパ管や血管などへの浸潤を認めた場合は局所再発のリスクが高く、追加的な手術を含む局所治療が必要である。本論文は、再発リスクの高い表在食道癌に対して、内視鏡切除後に化学放射線療法を行う事の有用性と安全性を検討した単施設後ろ向き観察研究である。解析対象は内視鏡切除後の非治癒切除例（粘膜下層浸潤、脈管侵襲陽性、切除断端陽性のいずれかを認める再発高リスク例）93 例であり、化学放射線療法（CRT）群 41 例、経過観察群 52 例の 2 群に分けて検討した。CRT 群と経過観察群では、年齢および併存疾患の数で有意な差を認め、CRT の毒性を鑑みた患者選択が行われていることがわかった。CRT 群の 5 年生存率は 87.5%と、既報の内視鏡切除後手術群と比べても同等の結果であった。CRT による治療関連死を認めず晩期毒性は既報より低頻度であった。本研究では、以下の点が優れている。①内視鏡切除後の経過観察群のアウトカムを明らかにした、②単施設ながら比較的多数の CRT 症例についてその有効性を確認した、③マルチポータル照射法が晩期毒性を減らすことを確認した。学位申請者の和田拓也君は、自らの研究について分かりやすくプレゼンテーションし、質疑応答の際も真摯な態度でかつ科学的な対応ができた。